

円地文子全集

第五卷

田  
地  
文  
子  
全  
集

第  
五  
卷

新 潮 社

第十一回配本(全十六卷)

円地文子全集 第五卷

定価三三〇〇円

昭和五十三年七月十五日印刷  
昭和五十三年七月二十日発行

著者 円地文子 © Fumiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行者 株式会社新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一

業務部 東京(〇三)二六六一五一

電話 編集部 東京(〇三)二六六一五四

振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。  
送料小社負担にてお取替いたします。

円地文子全集 第五卷 目次

狐 指 浅 う 半 紫 柿 菊  
間 しろ 世 獅 の  
彩 す が た 紀 子 実 車  
火 色 た

125 111 101 83 56 38 23 7

歴 冬 老 宝 春 潜 蛇 遊  
の 人 の の  
た  
史 旅 ち 石 歌 声 魂

301 285 278 265 253 244 212 159

川	新	猫	花	墓
波	う	の	食	の
抄	た	草	い	話
	か	子	姥	
	た	記		
	の			
	記			

418      391   368   333   325   313

円地文子全集 第五卷





## 菊 車

まだ現在のように道路もよくなるらず、自動車の往来なども不便な時分であったから、七、八年前のことにならうか。

九月の半ば過ぎまで軽井沢の家に居すわっていた私はある日上田市の婦人団体から講演を頼まれて、夕方近くに出向いて行った。どういう種類の集りだったかも今は忘れてしまったが、食事をすませて、集って来る人を相手に一時間足らずの話をすませた後、一休みして、帰りの汽車に乗り込んだのは九時少し過ぎであったと覚えている。

夏だけの臨時準急なども、もう出なくなっている時で、軽井沢止りの普通列車があるときいてその晩の中に家へ帰りたいのが一ぱいで、それで結構と乗ってみたものの、勿論二等車（当時は二等と三等という名で席が分れていた）はついていず、三等も戦前のものかと思うほど古ぼけた車室で数えるほどしか客は乗っていなかった。

菊 車  
「空<sup>↑</sup>いていて楽です」  
など、送りの人には体裁のいい愛想を言ったものの、車

が動き出した後では、シートの緑色の綿羅紗のすり切れたよこれ方と言い、揺れる度にぎしぎし悲鳴のように軋む音を立てる車体の古び方と言い、何とも乗り心地のよい車ではなかった。

まあ、鈍行と言っても二時間ちょっと辛抱すれば、厭でも軽井沢へ着いてしまうことだからと、私は自分に言いきかせて、窓の外へ眼を向けていた。恰度望<sup>もち</sup>に近い月が空にあって、沿線の田圃の向うに連なっている高くもない山々の背をくっきりと暗青色に照らし出していた。こちらの稲田はもうたつぷり穂を重らせているので、田毎の月は見る由もなかったが、鳥おどしに張り渡してあるビニール細工の鳴子が月の光を射返してところどころ異様にピカピカ輝いて見える。澄んだ濃藍の空の色といい、がらんとした車内に忍び入って来る夜気の冷たさと言い、そうでなくてさえ、秋の早い信州の山地にすることが厭でも身に沁み入って来る夜であった。

早く家へ帰りたいなど思っていると、汽車は十分と走らない内にごとりと一揺れして小さい駅へとまった。元々急行ではないのであるから、止るのは仕方がないとして、乗客の降り降りもないのに、一向動き出そうとしないのである。そうして、少しばかりくしてやっと発車したと思うと、又、次の駅でも止り、前と同じくらい暇どってなかなか発車しようとしなない。

四、五人乗っている相客はどれもこの辺りの農家の人らしい中年ものの男で、傍にも腰かけていないし、わざわざ立上って行って諷く気にもならない。窓からのぞいてみると、私の乗っている車の後ろの方には何台も貨車らしい車がついていて、どうも、それに貨物を積み込んでいる模様である。

さてはこの車は軽井沢まで荷物を送るのが目的で、客の方が便乗して行く形なのか、そうと早くから知れていれば少々無理をしても、小一時間前に出た準急に乗ったものをと今更口惜しがってみても後の祭りである。夜更けに名も知れぬ駅で降りて見たところでどうにもなるものではないと諦めて、ままよ、どう転んでも今夜の内に軽井沢までは運んでくれるであろうと度胸を握えた。

手下げの中に入れてあった文庫本を一冊ひっぱり出して開いてみたが、どうも、車体のぎしぎしむ音が耳について読みつづける気にならない。疲れている癖に眼が冴え

て来るのは足もとから匍い上って来る冷気のためもあるが、少し動いたと思うと、又、ごとりととまってしまいう汽車へのやり場のない腹立たしさも手伝っていることは明らかであった。

とうとう、四度目ぐらいに割に大きな駅で、汽車がとまってしまった時、私は、鬱憤を晴らすつもりでホームに降りて見た。どうせ、ここでも、悪くすると十分近くは停車するに極まっているのだし、たとえずぐ動き出したとしても、こののろろ列車に飛び乗ることなら、私にでもわけなく出来ると思ったのである。

この駅では降りる乗客も何人かあった。そうして、後部の貨車の近くに案の定、可成りな量の細長い薦包こもが積まれていて、駅員がそれを、さして急ぐ様子もなく次々に、貨車の扉を開けてある中へ運び込んでいたのであった。

それらの荷物は同じくらしい大きさで魚の簀巻すまききのように胴のふくらんだ形に包まれていたが、駅員たちは貴重な品物を取扱うように、大切にその薦包を両手に抱え上げ、煤けて黒い貨車の中に積みこんで行った。

私はそれを一体何だろうと思って眺めていたが、その内、何とも知れずしんと湿った植物性の匂いがどこからか漂って来るのに気づいた。

「うちのはもう積んで下さったんですか」  
という遠慮勝ちな女の声がある。

私はその方を振り向いて見た。私の斜めうしろに髪をひつつめにした中年の女が立っていた。一人ではなく、その女と並んで頭の真白な頬のこけた老人がいたが、私は、一目見た瞬間、その老人の異様にまじろがない瞳と、唇を半分開けかけた間から長い前歯がぬっと二本ぬけ出し、口尻から細かい白い泡のふいている顔に驚かされて、思わず二、三步避けるように後退った。

「市毛さんだ」

と駅員は他の一人に眼でしらせてから、

「ああ積みましたよ。一等いい場所にな……明日は東京へ行って、花市で一番の花になるぞ」

と老人の方に子供にいうように言った。

老人は威厳をみせた首の動かし方をしてうなずいてみせた。

「そう、そりゃよかったですね。さ、あなた、これで安心したでしょう。帰ってやすみましよう」

女は、これも子供をあやすような調子で言って、老人の案山子のように突き立った肩を撫でるようにした。

老人はそれでも黙って立っている。

その間にも、薦包みは次々に貨車の内へ運びこまれて行ったが、その頃になって私はやっと、あたりに漂っている植物性の芽えた薫りがこの薦包みの中から放散されるのだということを知った。

「あ、あれ……あれ、うちのキタだ」

その時老人が叫ぶように言ったと思うと、今、駅員の手で運びこまれようとしている薦包みに向っておよぐように両手をのばした。彼の小鼻はひくひく犬のように動いていた。

「あのニオイ……シラタマだよ」

「そうですか。じゃあ、一度嗅がしてお貰いなさい……もう汽車が出ますからね。匂いを嗅いだらすぐやめるんですよ」

女は逆らわずに駅員と眼を見合せて、老人が鼻を押しつけるようにしている薦包みを一度下に置かせ他の包みを先に貨車に積みこませた。

「さあ、もう離れるんですよ。白玉しらたまとはもうお別れしたでしょう。ね」

あやすように言って、こごみ込んでいる老人の背中を抱き、その手を自分の唇にそっと当てがうと老人は護符でも貼られたように薦包みから手を放して、妻と一緒に立上った。

やがて貨車の戸が閉り、発車のベルが鳴った。

私は慌てて、列車に乗りうつりながら、今見たばかりの不思議な光景を器用に頭におさめることが出来ないで、映画の「コマを不意に見せられたような錯覚から覚めることが出来なかった。

「気の毒なものですよ。あれであんな年まで生きてしまつたんですからね」

私はふりかえつた。

私の席の通路を隔てた向う側に、鼠色のジャンパーを着込んだ中年男が腰かけていた。皮膚は野ら灼けて皺も深かったが、人品は悪くない。そう言えはこの男はこの駅の前にはこの車に乗っていなかったことに私は気づいた。

「あの男の人は……気が変なのですか」

と私は好奇心に誘われて訊いた。

「気が変と言うより、バカでしょうな。まあ今の言葉で言えば精薄と言うんですかな」

男は訛のない言葉で話した。

「当人は何もわからんからいいですが、奥さんが気の毒ですよ。ああいう人に連れ添って、もう二十年以上世話をしているんでしょう。あの男が元々貧乏人の家に生れていれば、満足な結婚などする筈はないのに、なまじ、金持ちに生れただけに色々残酷なことも起つたわけですなあ」

訛がないだけでなく、相手の話し方は癖がなく、自然で聞きよかった。私はその時先刻駅員の呼んでいた市毛という姓にもどかしくひっかかっていた記憶にふっと焦点の合うのを意識したが、そのことには触れずに、

「今貨車に積み込んでいたのは菊の花ですか。あの男の人は匂いを嗅いでいましたわね」

と訊ねてみた。

「ええ、あれはあそこの家の花壇で作っている菊なんですよ。あの老人は菊の花だけにはえらく執着があって、花を送り出す時というとああして奥さんと一緒に夜でも朝早くでも出て来るんですよ」

「他の薦包みも皆菊なんでしょうか……」

「そうですね……まあ、今東京へ行く花は大抵菊ですね。この奥の方には花を作っている農家が随分ありますがそれが皆、東京が市場だから大したものですよ。花ばかりじゃありませんよ。妙な木の枝や根っこみたいなものだって、この辺の山稼ぎする連中は取って来て皆値をつけて、東京へ送るんですよ。すると、ちゃんと市場へ着くと、売れると見えて金を送って来るんです。東京はここの地附ぎの人間に居ながらで、儲けさせてくれる大旦那ですよ」

「そうですね。道理で、この汽車は少し動くと荷ばかり積んでいると思っていましたわ。人間が乗るのは初めから間違っているのですね」

私は苦笑した。

「そうですね。これに乗ったら、軽井沢までたっぷり三時間しかかかってしまいます」

「まあ、ひどい……上田で乗るときに誰もそんなことは教えてくれませんでした」

「いや、そりゃ土地の人も恐らく知らないでしょう。こん

な時間に菊の花を乗せた汽車が動いているなんて……まあ、風流だと思って諦めるんですなあ」

私は軽井沢へ着くのが十二時過ぎになると思うと、家の者も心配しているだろうと気になったが、譬えにも言う通り、乗ってしまった汽車から今更降りることは出来ない。諦めると言われなくても諦めるより道はないのである。

勢い、話は元の菊作りの夫婦の方へ戻って行くより仕方がなかった。

相手は昔は東京において農芸学校で教えていた人で、戦災で疎開して以来、この附近に果樹園を持って、自分で好きな高山植物の採集などもして暮しているのだと言った。この汽車に乗ったのも、急に思い立って小諸まで行き明日の朝早く浅間の裏の方へ登るためなのだそうである。

市毛正利と梨枝の夫婦を黒川が知るようになったのは、終戦の次の年であった。

黒川は幸い軍隊が内地勤務だったので、終戦になるとすぐ家族を疎開させてあった〇駅に近い農村に帰って来た。

そこは彼の郷里からも遠くなかったので、元々都会生活の好きでなかった彼は、戦争で受けた打撃も手伝って、最初は近くの町の中学教員になって、住み着くことにした。葡萄や林檎などを作る果樹園の経営に本腰を入れ出したのはそれから大分経って後のことである。

当時は世間一般が食糧に飢えていた時代で、どこの農家も果物や花作りどころではなく、水田のないところでは馬鈴薯や唐もろこしの栽培に大童になっていた。黒川の家でも、まだ丈夫だった父親が妻や嫁を督励して、畑作りに骨折っていたが、少し、居ついている内に黒川は自分の家と大して遠くないところに割に広い敷地を持つ東京風の新しい家があって、その裏の畑地で三十前後の女がしきりに働いているのを、学校の行き帰りによく見かけることがあった。

モンペばきで手拭に頭を包んでいたが、その女の畑灼けしない色白の皮膚に彫りの薄い目鼻立ちが淋しげに静まって見えるのが、どこか朝鮮美人のような印象で黒川を捕えた。

「あの家はここらには見かけない建て方だな。戦争の間に出来たのかしら」

と黒川はある晩食事の時に父親にきいてみた。

「おお、あれか、あれはお前、戦争の最中に東京の市毛さんが土地を買って建てたんじゃよ」

信州育ちの父親は市毛さんと言えば息子は知っているもののような顔つきで言ったが、黒川には心当りがなかった。

「市毛って何だい」

「市毛さんか。市毛さんは東京の大きな紙会社じゃないか。戦後は破産したという噂だが……先代は市毛徳市と言って、

有名な人じゃ」

「ああそうか」

黒川はやっとそこまで言われて市毛の名を思い出した。

「しかしあの人はもう疾うに死んだんでしょう」

市毛徳市なら信州の出身で明治の立志伝の中の一人として黒川も聞かされたことのある名であった。

「そうよ。徳市さんは先代で、その次の半四郎さんもなくなか出来た二代目だという評判じゃった……あそこに土地を買ったのはもちろん半四郎さんだが、入れてあるのは一人息子の正利さんの夫婦だよ」

父親はそう前置きして、正利が、市毛家の正嫡であるに拘らず、幼い時脳膜炎を病んだとかで、白痴とまでは行かないが、ようやく簡単な言葉の応答が出来る程度の能力の持主であること、それでも、年頃になると嫁を持たせなければならぬ必要が生じて来たらしく、その人身御供に上ったのが、飯田の方から当時市毛家に奉公に出ていた梨枝だったのだという。

「そんな阿呆な……昔の殿さまと家来じゃあるまいし……承知する女の方も普通じゃないな」

黒川は吐き出すように言いながら内心には、朝夕市毛家の裏を通る時に見かけるその嫁らしい女の無表情ではあるが、潔白な感じが腑に落ちなかった。

「誰も一応はそう言うんじゃ。おれもその話をきいた時に

は、いかに金で面を張られてもこともあろうにそんな男の女房になるとは女も女じゃと軽蔑したものだ。しかしな。おれたちがここにいついた後にあの家があんな近いところ

へ出来て、梨枝さんにも始終顔を合わすようになった、勤勞奉仕じゃ防空訓練じゃというと、出て来るのはいつもあの人でおれは警防団の部長しておったからずっと懇意にしたが、死んだお前のお母さんも言うし、松子（黒川の妻）も知っているが、梨枝さんにおかしなところは一つもない……人の先に立ってよく働かし、金持ちぶるところはないし、口のうるさいこの辺の女子衆は東京から疎開して来た奥さんと言えば大い鎗玉にあげて茶話の種にしおるが、あの人に限っては、あの足りん御亭主にようして上げて気の毒じゃという同情ばかりじゃった……それが二年も三年も変らずにいて、おまけにお前、戦争の終る前に、本家の半四郎さんが脳卒中で死になさって、あと、婿さんやら、おっ母さんやらがようなくてあれだけの財産もめっちゃめっちゃになってしまった。結局、あの家屋敷だけやっとなりに残ったとやら言うのに……今日この頃食糧の足りん中でも、あの大飯食らいの正利さんに薯じゃ、蕎麦粉じゃと食わせるものを集めに歩いて、農家の人に編物してやったり、子供の洋服縫うてやったりして尽してる気持、嘘や見せかけで出来ることじゃない。あの人は観音さんの化身かとおれは時々思うことがあるぞ」

父親は真顔で熱心に言った。ほんとうにそう信じている様子である。いや、戦争末期から敗戦後にかけて人間のまどつてゐる衣裳を無慈悲にひきめくつて赤裸の恥部を用捨なくさらけ出させなければ置かなかつた時代だけに、普氣質の父親には梨枝のような存在を觀音さんの化身としてでもそのまま信じたのであろう。

黒川にもその心事は呑みこめないではなかつた。そうして自分の内にも梨枝を菩薩の化身と浄化して感じたい欲求は確かにないではなかつた。

黒川の父の願いに背かないままに、梨枝はその後の十数年間も、夫への献身をつづけて生きて來ている。今では市毛の家は地所の大部分を林檎園にして、その収入でどうやら生活を賄つてゐる。菊の花を作るのは半分は商売、半分は正利が花を見るのを喜ぶので作るのだがそれほど収入にはならないらしいと黒川は言つた。

「一昨年でしたかな。梨枝さんは褒章を貰いましたよ。えと、何という名だつたかな。兎も角、精薄の夫に愛情を注ぎつづけて、長年、世話をして來たことを褒められたので、つまり貞女の鑑かたみというわけですがな。まあ、たしかに現代では珍しい話ですから、褒められて然るべきだと思ひますね」

黒川の長い話をきいてゐる内にも、汽車は飽きもせず、次々の駅で悠々と停車し、その度に、薦包みの菊が貨車に

積み入れられて行く模様である。

小諸から追分にかかつて、汽車は急に速度を出し始めた。月は中空に高くかかつてゐるらしく、影は全く車窓からは見えないままに、冴え増さつた光が古鏡のように沿線の風景を錫色に照らし出している。その錫色にやがて雲母摺きらびのような燻し銀の滲んで來たのは高原に入つて霧が地に近くまいて來たためであつた。黒川が小諸で降りて行つたあとには、もうほんの一組、向うの方の入口近くに二人連れの男が乗つてゐるだけで、この車室には乗客は残つてゐなかつた。夜が深けたのに高原に入つたためか、腰かけてゐる足袋の先から縮れるような寒さが匂いのほつて來て、しんと下半身を浸した。

しかし、私は今黒川という園芸家からきいた市毛正利とその妻に私の記憶の中から拾ひ出したいくつかの事柄を附加えるのに熱中してゐて、時々肩をすくめたり、両膝をかたく合せて縮めて見たりしながら、実際にはそれほど身体からだの冷えるのを氣にしてはいなかつたのである。

市毛徳市、市毛半四郎などという名前をきいた時、私は長い間忘れていた市毛家の精薄の息子について記憶を喚びさませ、もう少して、そうそう、その人のことなら、私もきいてましたと黒川にいうところだつた。

黒川の話にある正利と梨枝との結婚した恰度同じ頃を、



別の面から見ていた人々の話を私は偶然きいているのであった。それは恰度日華事変が始まって一年ぐらいした時で、召集の赤紙が何よりも若い男たちの眼に燃えている火のよ  
うな印象でぶつかって来た頃であった。

私の友人の夫に精神科医があつて、私立病院の医師であると同時に、S大の脳研究所へ週に何度か通っていた。そこには医学部の助手や無給の副手も研究に来ていたが、よく長瀬の家に集つて話して行くことがあつた。私とそのグループと知合いになつたのは、ある戯曲に精神病の患者を扱う必要があつて、病院に行つて見たり、医師の経験を訊いたりした時からであつたが、ある時、長瀬の家で三、四人の若い医師と一緒に居合つた時、その内のいつも常連で来る樫村という男が席に居合せなかつた。

「樫村さんは？ 今日当直ですか」

と私がきくと、仲間同士顔を見合せて意味あり気に笑つてから、

「当直と言えば、まあ当直だな」

「そう正に当直だよ」

「大変な当直だ」

などと言っている。

私は女とでも逢いに行つてゐるのかと思つて、そのまま黙つてゐると、長瀬が口を出して、

「言つたつていいだろう。これもFさんには参考になるか

も知れないぜ」

と言つた。

「あんまり、体裁のいい話でもないからな」

「まあいいや、何も身すぎ世すぎだ。こうでもしなきゃ食えないつて話を一つ書いて貰おうかな」

内の一人が居直つた形で、

「樫村はね、クランケのうちへ夜番に行つてるんですよ」

と言つた。

「ああそう……暴れるような人なんですか」

精神病の患者の場合にはよくあることなので私は躊躇なく訊ねた。

「ううん、まあね、暴れないとも言えないけど、そこんところは難かしいやね」

友田という青年が別の一人の方をみて、

「お前の行つた時はどうだった」

「おれの時は何ごともなかつたよ。幸いに……お前がいつ

も悪い番に廻るんだつたな」

友田は頭をかいて、

「そうなんだ。全くおれは籤運がわるい……この分じゃ競争に行くとも一番先に戦死するぞ」

「そうでないよ。見られないところを見るなんてそうそうあるもんじゃない。『のぞき』なんてお前、金が要るもん

だぞ」